

## コミュニケーションとスピリチュアリティ

授業科目名	コミュニケーションとスピリチュアリティ	単位数 2 単位
英語標記	Communication and spiritual dimension	
授業コード	第 1 学期 360111 第 2 学期 360212	
受講人数	10 人以内	
担当教員	小林 恭	
対象	全研究科大学院生	
開講時間等	第 1 学期＝月曜 5 限 (4 月 12 日～)、第 2 学期＝月曜 5 限 (10 月 4 日～)	
開講場所	箕面キャンパス：小林恭個人研究室 (A 棟 607)	
キーワード	ことばと身体性、非連続の連続、文化と文化を超えるもの。	
授業の目的	個人と個人とのコミュニケーション、異文化間コミュニケーション、諸宗教間の対話など、いずれも今日焦眉の課題である。その可能性の根拠を探求し、人間存在構造の「非連続の連続」という観点について研究する。連続性の面に視点が置かれがちの文化的生のレベル、心理学的レベルだけではカバーできないスピリチュアリティ（霊性）のレベルをも考慮に入れた視点の必要性からコミュニケーションの根拠を考える。メルロ＝ポンティの身体論・言語論等を導入とし、西谷啓治の「うつし・映し・移し」の哲学、禅問答をその代表として宗教的言説に見られる言語の特徴などを研究し、それと人間の「日常性との本質的關係」を考察する。	
講義内容	※旧大阪外国語大学の授業科目「人間形成思想研究」と合同で開講される 多くの心理学的、社会学的な立場でのコミュニケーションの考え方は、つながりのないところ（またはつながりのないようにみえるところ）に如何にしてつながりを見つけてゆくかという、いわば連続性の面を中心に考えられてきた。それに対して、人間存在のトータルな構造としてスピリチュアルな次元をも入れてコミュニケーションを考えると、個と個の絶対的非連続性ということをその本質に含むような人間存在論の視点が必要と考えられる。 そのような「非連続の連続」という問題を正面から問題にしたのは、西田幾多郎および西谷啓治らの論である。この授業では彼らの問題提起を考慮に入れて、それらとの対比を念頭におきながら、直接にはメルロ＝ポンティのテキストを読み進める。『知覚の現象学』のなかの「表現としての身体」をまず対象にする。このテキストは未だ非連続性の観点は表には出ていない。（非連性の問題が読み取れるのは、のちの「間接言語と沈黙の声」という論文であるといえる。）それだけに、思考の出発点としては「表現としての身体」のほうがわかりやすいものであり、彼の後年の思想の展開を理解するにも基礎として重要である。以上のような展望の中で、当のテキストを取り上げる。「表現としての身体」という 1 つの章を 15 回の授業に配分して読み通したいが、受講者の関心事や問題意識を汲み上げながら進むので、授業進度には偶然性の余地があり厳密に予定どおりに進められないこともある。 配布テキストとしては、みすず書房版の翻訳を用い、適宜フランス語版、英訳版を用いる	
教科書	コピー配布。	
参考書	講義時に適宜紹介する。	
成績評価	平常点と適宜の課題。	

### 島と島をつなぐこと？

現代人の常識的な考え方として、人と人のコミュニケーションとは、まるで海上に浮かぶ孤立した島と島のあいだを電話でつなぎあうかのようなイメージでとらえられる傾向がある。

このようなドクサ（常識的臆見）をやしない支えるものとして、二つのものがある。「言語は伝達のための道具であり、情報をのせて運ぶ vehicle である」という道具的言語観と、「からだは等身大のものである」という個別独立的身体観である。

この二つが相互に共犯関係に在って、上記の常識的コミュニケーション観を生みだしているといえよう。

### 存在の様態としての言葉・響き合いとしての身体

孤立した島と島のあいだに連絡をつけるようなコミュニケーション観ではうまく対応できない領域がある。育児、教育、看護、介護等の領域はその代表であろう。

そこでは必然的に、上記の言語観・身体観が問いなおされざるをえない。

孤立したものをつなぐのではなく、孤立とみえるものの根底に既に存在する何らかの連続性を再発見するような身体観と言語観が要請される。

そのような身体と言語の問題を同時にひとつのこととして問題にした先駆けがメルロ＝ポンティである。

### 連続性だけでは足りない領域

端的に言えばそれは宗教的次元である。絶対者（神または仏）に対して立つとき、あるいはそれほど宗教というものを意識しない現代人にとっては、死に直面するとき、絶対の「個」というあり方があらわになる。連続性というのは、人と人との「水平的」な局面とするなら、ここであらわになるのは人間存在の「垂直的」な局面である。

日常性においては覆い隠されていることが多いとはいえ、人間のあり方をトータルにとらえるならば、水平面と垂直面の両契機を同時にふくんだ人間観およびコミュニケーション観が必要となろう。